

第1回 NITS 大賞（平成 29 年度）エントリーシート

対馬市立厳原北小学校

C-15

【活動名】 ESD からの授業改革～持続可能な対馬を支える人材育成～

解決すべき課題：

純朴な島の子供たちが育つ対馬ではあるが、人口の流出、地域社会の衰退が続き、島の存続が問題となっている。高校進学のため対馬を離れる生徒も多く、そこで培われた能力を故郷に尽くすサイクルが整っていないことが長期的展望からの課題である。また、児童は少人数の環境から人前に出て自分の考えを積極的に述べる力が育っていない。全国学力・学習状況調査の結果からも、表現力や実践的態度・行動力が不十分と分析している。併せて、学校現場としてもふるさとを題材にした地域学習を積極的に行ってはきたが、地域再生に取り組む人材の思いや活動の実際を体験させ、将来学業を終えた後に対馬に戻って貢献できる領域や内容があること、またその活動自体への魅力を十分には取り上げていないことが中・短期的展望からの課題である。

目的や背景：

全国学力・学習状況調査の結果から、子どもたちの学力の特に活用力に課題が顕著であった。その原因として、児童の自己有用感や表現力、実践的態度・行動力の育成段階の指導不足があった。特に、総合的な学習の時間において「積極的に人前に出て自分の考えをしっかりと主張する場」の設定やそのために考えを精査し、表現する段階での指導、実践的態度・行動力に結びつけるための豊かな体験学習などのプロセスに不十分さがあると分析した。併せて、社会的な問題として、国境離島「対馬」は人口減が続いており、2040 年には島の存続ができないのではないかとされている。また、今後の大学入試改革では、主体的で探究的な学習能力・態度がどれだけ身に付いているかが評価・診断されることとなる。こうした状況におかれている児童に、持続可能な開発のための教育（ESD）で培おうとする概念及び能力・態度の育成を図ること、並びに活用力を高めるための学習指導ポイントを明確にした学習プログラムをマネジメントし、実行に移すことで課題の解決に取り組むこととした。

活動内容：

（1）カリキュラム・マネジメント（学習プログラムづくり）

校内研修において、校長が提案した「島の宝学びプログラム」を、担任が発達段階に応じて選定し、より実践的な学習過程に修正を加えた。テーマに関連した実践活動や研究を行っている多様な専門家及び地域人材と出合わせ、対馬の再生に向けた大人の姿・本気を実感させた。探求的な学習の展開に、人材を活用したより本格的な体験活動を授業に取り入れた。直接体験が難しい場合は、skype を使って学校に居ながらにして、直接聞き取り調査を行ったり体験や交流学习をさせたりすることにより、離島のハンディを感じさせない効果的な学習の展開を図った。学習過程において、育成すべき「ESD の概念、能力・態度」と他教科の既習内容を明確にした。個々の児童にテーマのキーワードからウェビング図を作成させ、学習の導入・終末時の変化を比較させて自己の変容と成長に気づかせるようにした。

（2）校内での実践方法

学年別のテーマで追究…… 第3学年「つしましいたけをアピールしよう」立花奏恵教諭、第4学年「対馬の歴史や校区の歴史の文化財について調べよう」森本 義久教諭、第5学年「ツシマヤマネコをPRしよう」鴨川忍教諭、第6学年「海岸漂着ごみから環境保全について考えよう」梶木祐輔教諭

校内研究に位置づけ、担任以外の教員も授業支援を行う。* 授業支援 教諭：日高 睦 教頭：松村晋弥 校長：平山俊章

（3）発表会・啓発 対馬市教育委員会に ESD 人材育成研修会開催と県教委の後援を促し、参加した島内の小中高校教諭に、他校での実践を含めて本校の取組を担当教諭から実践発表をした。ESD の必要性和学力向上との関連について啓発を行った。

活動の成果：

- 授業前と授業後のウェビング図比較から、児童の学習に関わる概念の獲得に成果が見られた。
- ESD 実証校児童アンケートの結果及び児童の学習ノート、ウェビング図の記録の分析から、
- ・94.9%の児童が「楽しかった」と回答し、学びの楽しさや本物への感動を味わうと共に、92.3%の児童が、自分たちの暮らしとの関わりが深いことへの認識を深めた。「ごみが海に流れる前に町で拾う」「自分にできることから取り組んでみたい」など、今後の自分自身の関わり方を思い描いている。
 - ・「自分たちでしいたけを育てたい」「歴史のすごさを伝える」「自然環境をなくさない」など、ESD の概念や能力・態度に関わる気づきが表れている。
 - ・「ツシマヤマネコを守るために多くの人々が関わっていて、自分たちもその中に入り活動を広げたい」など、多様な人材との関わり成果を表現している。
- ESD 実証校教師アンケートの結果及び校内研究の協議から、
- ・「体験を基にした深い学びや他教科との関連付け方がよくわかった」「児童に主体性や発表力が育ってきた」など、授業改革の効果を実感している。
 - ・既習事項の関連づけや ESD の視点など、カリキュラム・マネジメントの技能が向上した。また、更なる他教科との関連の必要性を実感している。
 - ・課題であった児童の発表力の向上並びに学校の組織的な取組に成果があったと評価している。
 - ・「つながり」「連携性」など多様な ESD の概念・能力が、今回の活動と関連していたと理解し、ESD の必要性を評価している。

アピールポイント（アイデア）：

教職員間で「新しいことを始めるということではなく、育てる概念や能力・態度を ESD の視点から学習を見直す」ことの実現を図ることができた。プログラム作成段階で、活動と関わりのある国語や算数の既習事項をカリキュラムで確認作業を行ったことで、既習事項の定着への意識が高まった。校長として、総合的な学習の時間に学んだことを、4年生道徳で補充・深化・統合を図る授業を公開した。行政並びに大学・専門機関・一般社団法人など、多くの関係団体・関係者が ESD の推進を学校に期待しているが、学力の向上を最重要課題に捉えている学校現場とのギャップは感じた。今回の研究は、相手側にも多くのメリットがあり、多くの協力体制が築けた反面、ESD に学力向上の視点を取り入れた実践例は少なく試行錯誤であったが、本校なりの授業スタイルが整いつつある。ESD を中心に他教科も絡めた新カリキュラムの作成に入った。5年生は、skype での台湾の文徳国民小児童との国際交流、対馬学フォーラムでの発表など、児童の発表の場と世界観を広げることができた。対馬市教育委員会、長崎県教育委員会、長崎県環境部、NPO 法人、立教大学など関連機関・団体との連携した教育（研究）活動となった。

